

第38回

うつのみやこども賞だより

令和3年度 3回

市内5・6年生の選定委員さんたちが、月に4冊の本を読んで、年間で一番人気の高かった本に「うつのみやこども賞」を贈っています。

《今月選ばれた本》

『クルミ先生とまちがえたくないわたし』

令文 ヒロ子／作 (ポプラ社)

～読んだ本の感想より～

- 夜中の2時(時間外)に来たおばあちゃんをぱっとみただけで「脾臓摘出手術を受けた」ということを見ぬいたのが、かっこよかった。改めて、お医者さんのかっこよさを知った。
- たよりがいいはないが、医りょうのことはねっしんなクルミ先生にモトキが藤島クリニック再生計画をうちたてて、このあとどうなるかドキドキしながら読みました。
- クルミ先生とモトキはしんせきなのに、性かくがまったくちがうというところがおもしろかったです。
- てきばき家事をして、藤島クリニックも再生しようがんばる姿がとても気持ちよかったです。
- 主人公が最初はいやがっていたけど、だんだん気持ちが変わって成長していくのがおもしろかった。



令和3年8月1日

『みつばちと少年』

村上 しいこ／著 (講談社)

- はじめの文章にでてきた、「ぼく」。おばあさんとの会話がキツいな、と思ったけれど、まさか「ぼく」に事じょうがあるなんて知らなかった。海鳴たちと出会って、だんだん変わっていく「ぼく」はすごかったし、イカメシコンテストもがんばっていて、すごーいと思いました。
- 海鳴や杏奈みたいに、いろんな事情でくるしんでいる人がいるんだなとあらためて思った。「もう希望しかないね!」という言葉がとても心に残った。
- マーヤがいろんな生き物に出会って世界を実感する場面がおもしろかった。
- 読んでいて「ふつう」ってなんだろう?と思った。

『青の読み手』

小森 香折／作 (偕成社)

- 下町ネズミであるノアが、猫の親方は「ロゼはもういない」といっているが、それでもさがすところに、まず感動しました。
- 予想外の事がたくさん起こって楽しかった。
- 貧民街で暮らすノアが「青の読み手」になったことにおどろきました。と中、「サロモンの書」のことを怖いと感じたけれど、セシルやパルメザン、トマスなどの大切な人達に出会い、ロゼにも再会できたのでよかったなと思いました。
- ファンタジーのお話を久しぶりに読んだので、とてもドキドキしました。「サロモンの書」を通して成長していくノアを見ていると、ページをめくる手がとまりませんでした。物語の続きが知りたいです。

『星明かり』

熊谷 千世子／作 (文研出版)

- すばるが星のスパルをとおして、自分がなぜうまれてきたのかしらべようとしているところが、とてもかんどうしました。
- プレゼントをあげる時、ぼくも、プレゼントをわたす人が好きな物を考えるから、気持ちがよくわかった。プレゼントをわたすのがせいこうしてよかった。
- すばるが聡子さんと花野とうちとけていけてよかった。
- 主人公と主人公の母親は血がつながっていないけれど、育ててくれたお母さんと生んでくれたお母さん、二人の気持ちが主人公に届いてくれて、本当に良かったと思いました。